

和歌七首（歌）：文苑

著者	陶山，喜六
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 6
ページ	7 8 - 7 8
発行年	1912-06-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/6382

野中の櫻 苦草のさかゆるのべに咲いで、花もひとしほ色まさりけり
 首夏の山 雨雲はあどなくはれてはがらかに青葉が末に山鳥のなく
 薔薇の香り 賤の男が駒に水かふ里川の岸の野ばらに入日さすなり
 まうち見る 山田にははや水ひきぬ今よりや蛙の聲もしげくなるらん
 まいを 水郷柳 岸のべにつなげる舟をかくすまで生ひのびにけり里の青柳
 行列 春雨のそぼふるゆうべぬれつゝも葬式ゆくなり山寺のへに
 海邊に立ちて くだけてもわれてもよする磯なみのたけき心を心ともがな

この五日うつし心もなされは狐の塚をふ
 みてこしかも……………晶子……………